

「コロナ敗戦」を直視せよ

一般社団法人全国公私病院連盟会長

邊見 公雄 へんみ きみお

1968年京都大学医学部卒業。1978年兵庫県赤穂市民病院外科医長、1987年同病院長などを経て2009年同名誉院長。一般社団法人全国公私病院連盟会長。公益社団法人全国自治体病院協議会名誉会長。特定非営利活動法人地域医療・介護研究会JAPAN会長。2005年9月～2011年10月中央社会保険医療協議会委員。著書に『令和の改新 日本列島再輝論』（幻冬舎メディアコンサルティング）。



人類難とも言える「百年に一度」のパンデミックとなったコロナ禍で分かったのは、われわれは「宇宙船地球号」に乗る乗客であるということだ。自分だけ、家族・友人だけ、母国だけがウイルスや疫病に勝ったとしても解決しない。世界中の人がワクチンで免疫を獲得し、薬剤や医療の恩恵が必要なのである。効率至上主義や人間中心主義でこの星の環境を傷めつけた人類に、創造主がお灸を据えたとも感じている。

厚生労働省によると、2020年1月、日本で1例目となったコロナ感染者は、神奈川県の30代男性で、発生源とされる中国・武漢市への滞在歴があったとか。次は奈良県のバスドライバーで、武漢市からのツアー客を乗せたバスを運転していた。同県は私が初めて外科医として赴任した地で、私もよくお世話になっていたバス会社だった。風評被害を心配していたところ、やっぱり大きなダメージを受けていたことを、最近現地を訪れて知った。

2月3日に横浜港へ入港した豪華クルーズ船ダイヤモンド・プリンセス号の船内大量感染では、横浜市立市民病院を中心に主として公立、公的病院が患者の多くを受け入れた。イギリス船籍で乗客乗員合わせて3711人。多国籍の高齢者で、基礎疾患があったり、夫

婦同室や長旅の疲れなど、パンデミックをもたらす要素は多かった。感染患者はどんどん増え、全国からDMAT（災害派遣医療チーム）などが出動し、神奈川県以外の病院にも搬送されたが、外務省、厚生労働省、国土交通省と多岐にわたる仕事なので、入院手続きにも手間取った。朝に依頼のあった患者の入院が準夜帯（午後5時から深夜0時）になることも稀まれではなかったという。

乗客には外国人の裕福な高齢者が多く、日本の医療を信頼できないのか、失礼な態度や言葉を発する人も少なからず存在した。ある病院の医師や看護師は「国際問題にならないよう東京五輪の『おもてなし』に徹した」と話していた。ちなみに、私の経験でもモンスター患者は地位のある富裕な高齢者が多かったよ

うに思う。職業では医師・教師・僧侶が3悪である(この3つを兼務していた友人もいたが、彼は例外的にジェントルマンであった)。

どんな病気なのか全く分からず風評被害が拡大していった頃である。ある厚労省の医系技官は、ダイヤモンド・プリンセス号での検査業務を終え深夜にタクシーに乗ろうとしたら乗車拒否され、疲れた身体で宿まで歩いたとのこと。この直後、米国海軍の戦艦でクラスターが発生したが、CDC(米国疾病対策予防センター)は迅速に対応した。後に日本でも自衛隊中央病院の感染対策が称賛され、PCR検査やワクチンの大規模接種に自衛隊の医官や看護官が出勤。さらには沖縄県など医療資源の乏しい所へも派遣するなどその目覚ましい活動は称賛に値し、歴史に残すべきであろう。個人的には非武装中立論者であるが、災害や防災への役割は認めざるを得ない。

2つの大きなミス

第1波は瞬く間に全国に広がった。感染拡大を防げなかった要因として2つの大きなミスが挙げられる。1つは感染発生源とされる中国から春節のインバウンド観光客を迎え入れたこと。そしてもう1つは、当時の安倍晋三内閣が習近平・中国国家主席を国賓として招こうとしたことである。今でこそほとんどの国民がノーと言うであろうが、その頃は中国に製品を輸出している産業界を中心に習氏を招こうという機運は強かった。さらに東京五輪なども重なり、コロナ対応は常に後手、後手に。

第1波ではマスクやガウン、エタノールなどの消毒薬の不足が露呈した。供給のほとんどを労賃の安い中国などに依存していたからである。レインコートをガウンとして使用し

た松井大阪市長のニュースが流れ、善意のレインコートが集まったり、消毒用に酒や工業用アルコールの転用が報じられたりした。

薬局やコンビニでのマスク争奪戦では、買えなかった人からの嘆きと怒り、諦めの声が上がリ、その後、マスクが供給されるようになってから配布されたのが俗に言う「アベノマスク」である。小さくて使い勝手が悪いなど、不評で大量の在庫を抱えることになり、その保管費用だけでも莫大な国費が必要になった。

人工呼吸器やECMOも少なく、またICUは医師や看護師が不足して機能しなかった。これではいくらオスプレイを購入したりイージス艦を配備してもPPE(個人用防護具)さえ無い国では国民は守れない。国家安全保障ばかりに気を取られ肝心の国民安全への手拔かりが露呈したのである。

これを象徴した笑えぬ笑い話を紹介したい。2021年9月、私が会長を務めるNPO法人地域医療・介護研究会JAPANが開催したシンポジウムでのこと。元防衛官僚の国会議員OBに司会者が「個人の防災品は中国頼みの物が多いですが、防衛装備、例えば戦車などに中国製の部品は使われていないのでしょうか?」と尋ねた。すると、「国家機密なので答えられません」との答え。これでは「ある」と全員が推測しても仕方ない。会が終わった後、「戦車は千以上の部品から成り立ち千車とも。重要でない所は中国の部品かも」と私にポロリ。この国は、大丈夫だろうか。

感染対策と経済、二兎追う者は…

さらにコロナ初期の大きな失敗は、感染対策と経済対策の二兎を追ったことであろう。読めても書けなかった“自粛”や“^{ひっぼく}逼迫”が今回

のコロナで書けるようになったのはコロナで良かったことの稀な例である。流行語大賞になった「3密」や「ステイホーム」「黙食」「クラスター」「パンデミック」などの言葉も市民権を得た。リスクコミュニケーションの弱さ、そして「安心安全、先手先手、ワクチン接種」しか言わなかったことも菅義偉内閣の短命に結び付いた。

一方、都道府県が独自の対策を取り始め、「〇〇方式」「〇〇モデル」との呼称が始まった。その中で私が金メダルと評価するのは和歌山県だ。済生会有田病院でクラスターが発生したが、仁坂吉伸知事は保健部の野尻孝子技官とタッグを組み、早期からPCR検査や入院体制の整備を着々と進めた。隣の大発生区域である大阪府とも密接な協力関係を築き、現在に至るまでまん延防止等重点措置区域とはならなかった。

第1波では土地柄もいろいろと出た。岩手県や青森県、秋田県では感染症患者も少なく新幹線の駅で体温測定。鳥取県、島根県は学生の帰省で感染が拡大しないように郷土品を学生に送ったりしたらしい。私が育った徳島県では県外ナンバーの車に石が投げられたりと少し恥ずかしい出来事も。

第1波では私の友人でもある尾身茂氏をトップとした「新型コロナウイルス感染症対策分科会」が頻繁に開催され、委員は各種メディアに引っ張りだこであった。“コロナの女王”と称された岡田晴恵氏は数多くの番組でコメンテーターとして活躍したが、今回の感染症に対しては真の専門家は皆無だったと総括している。

専門家会議は内閣に少し遠慮し過ぎたようにも思える。行きつけの寿司屋の大將から「この病気は何年くらいで収まりますか」と尋ね

られ、「外科医なのでよくは分からないが1～2年はかかるのでは」と答えると、この疫病神めという顔をされた。それも“誤診”で既に3年目に入っているのだが。WHOも初動が遅く、中国寄りとの批判にさらされたテドロス事務局長も煮え切らなかった。

「コロナ戦記」

第1波が少し下火になりかけた頃、当NPOでは「コロナ戦記」のようなものを残さなければと考えた。これは、たった75年前の沖縄戦記すら確固たるものはなく、米国の図書館などのものが正確、との反省からの取り組みであった。コロナと闘っている病院や施設、行政をはじめ医科大学の学長からは教育界の現状を、薬剤やPPEのサプライチェーンの脆弱さについては物流担当者^{ぜいじやく}に執筆を依頼した。さらには医療事務の受託業者や、中小企業の実情に詳しい税理や会計のプロ、失敗学に詳しい大学教授、医療界では医師や歯科医師、薬剤師、看護師、臨床検査技師、介護の現場、精神科病院代表などにも依頼した。まえがきは日本医師会の横倉義武会長(当時)にお願いし、ダイヤモンド・プリンセス号で大奮闘した横浜市立市民病院長の石原淳氏や、関西で頑張った兵庫県立尼崎総合医療センター院長の平家俊男氏からも寄稿いただいた。7年連続救急医療評価日本一の神戸市立医療センター中央市民病院で院長を務める木原康樹氏は、院内クラスターのために着任初日がコロナ会見となり、救急を全面停止して駐車場にコロナ病棟を新設するなど常にコロナ戦線の最先端を走ってきた経験を執筆していただいた。富山市立市民病院長の石田陽一氏からは地域医療構想で急性期から回復期への患者転院の難しさ、緊急事態宣言下での公

立病院の定期人事異動に対する疑問、今後の病院設計など現場経験に基づく悲痛で貴重な提言もあった。全国自治体病院協議会会長の小熊豊氏や日本病院会顧問の末永裕之氏などからは病院団体代表としての総括的なご意見をいただいた。詳しくは『新型コロナウイルスとの闘い 現場医師120日の記録』(PHPエディターズ・グループ)、および第2弾として

刊行した『新型コロナウィルスとの闘いⅡ 看護師が見たパンデミック』(同)をお読みいただきたい。

政・官・財、教育、メディアの集中

今回のコロナ禍で最もかわいそうだったのは小学校から専門学校、大学までの児童、生徒、学生である。安倍元首相による休校要請やオンライン授業中心では友達にも会えず、クラブ活動もままならなかった。小学校の入学式や卒業式で保護者の参加は1人のみという場合が多く見られた。医療系では実習生の受け入れができず、バーチャル実習となるが多かった。マッサージの資格試験で実技をどうするか悩ましいとの声も。大学生や院生はアルバイトが減ったり無くなったりして授業料の減免を願う者も少なくなく、踏んだり蹴ったりの生活が続いた。

『新型コロナウイルスとの闘い 現場医師120日の記録』

特定非営利活動法人地域医療・介護研究会 JAPAN、株式会社ヘルスケア・システム研究所 著



発行 PHPエディターズ・グループ
初版2020年8月14日
1400円+税

『新型コロナウイルスとの闘いⅡ 看護師が見たパンデミック』

特定非営利活動法人地域医療・介護研究会 JAPAN、株式会社ヘルスケア・システム研究所 著



発行 PHPエディターズ・グループ
初版2021年8月4日
1300円+税

これを執筆している2022年4月現在は第6波も中休みの様相だが、第7波に向けて着々と悪巧みを進めているようにも感じている。この国は、「昭和元禄」とか「Japan as No.1」とか浮かれている間に三等国になってしまった。ワクチン敗戦にデジタル敗戦、少子化の加速、政府や官僚の劣化、貧弱なマスコミ、劣るリスクコミュニケーション、そして元凶の東京一極集中。どれをとっても口惜しいばかりである。

私は遺言集の自費出版『令和の改新 日本列島再輝論』(幻冬舎メディアコンサルティング)で、この国の国難は少子化・人口減少と東京一極集中・地方衰退と主張した。コロナ感染症は、7密8密の東京が続く限り長期化は必然である。3密でも駄目なのに政・官・財の最強のトライアングル。教科書には三権の

1つとされながら、行政の下請け的な司法。

一番の悲劇は教育の集中である。農業大学や水産大学までもが田畑も海も無い山手線の内側にある。若者は家賃の高い都心から離れ、平均90分かけて満員の電車やバスで通勤・通学している。その結果、無症状感染者がウイルスを拡散する。また非正規雇用で賃金も安く、結婚や出産、育児をする環境にはない。このため東京都は47都道府県中ダントツ最下位の出生率、つまり「少子化推進本部」となっている。

さらにあらゆるメディアが集まり、NHK（日本放送協会）はTHK（東京放送協会）となっている。NHKは4分割し、JRは再統合して切り捨てられた北海道や九州、四国の通勤・通学・生活路線を守るべきであり、東京発名古屋着（末は大阪）の“地下鉄”、リニアは中止すべきである。徐々に近づく首都直下型地震に備え、皇室も地方に分散すべきだ。

医療と教育にはゆとりが必要

特に痛感したのが医療の脆弱性である。私は阪神・淡路大震災の経験から医療と教育には遊び、つまりゆとりが必要であると口酸っぱく主張してきた。遊びのない子供は伸びないし育たない。医療もゆとりがないと今回のようなコロナパンデミックや災害ではパンクしてしまう。阪神・淡路大震災の時、優良病院と言われた病院は満床状態で患者を受け入れられず、薬を処方しようにもストックがないため十分には対応できなかった。逆に少し病床稼働が低く、割とのんきにやっていると思われた病院が活躍したのである。

ところが、2022年の診療報酬改定や国の

予算を見てみると、これらの経験が生かされ反省しているとはあまり思えない。「新しい資本主義」の中核は医療・介護と保育・教育であるべきだと考える者としては落胆の極みである。

厚労省の「三位一体の改革」も少し修正すべきである。まず医師の需給、地域偏在を解消の後に地域医療構想に着手、最後に勤務医の働き方という順にやらないと、地方の医療は切り捨てられる。今回のコロナにしても再編統合の対象とされた436病院のうち200以上の公立・公的病院が対応したのである。「民にできることは民に」と府立病院や市立病院を減らした大阪府の失敗を、国が踏襲する愚は避けるべきである。

おわりに

最後に国の財政制度等審議会について触れておきたい。この委員会は財界主導で、御用学者も加わっている。一発当てたベンチャー企業のトップはいるが、パンデミックを切り抜けてきた京や浪花の老舗の主人はゼロ。医療界からは誰もおらず、医療や教育をマイナス要因、負債と考えている効率至上主義や新自由主義者が多い。岸田文雄首相の言う分配重視、新しい資本主義の観点からも委員の総入れ替えが望まれる。このままでは「失われた〇〇年」が依然として続きそうである。

日本国民に告ぐ。この「敗戦」に目を背けるな。この現実には早く気づき、一億総火の玉となって戦後復興に取り組まなければ、米・中・韓・台の後ろ姿は遠のくばかりであろう。

「広島、長崎の廃墟からのフェニックスよ、いま一度」